

舞い降りた鷹は獲物をつかむか？

その者たちの破滅を望みたまふとき、
神々はまづ彼らを狂気へといざなふ。

エウリピデス『断片』

タカ 力派はついに時を得たかも
しれない。かわいそうにタカ
力派たちの目論見を砕きつづけ
いくども彼らに挫折を味わわせて
きたのは、歴代のアメリカ大統領
である。弱虫だったのは民主党の
クリントンやカーターだけではな
い。今年のはじめ、領空侵犯した
米軍機を中国が大胆不敵にも墜落
させたというのに、ジョージ・ブ
ッシュは中国本土へ軍隊を送りこ
もうとはしなかった。父親のジョ
ージ・ブッシュもバグダッドまで
は兵を進めなかった。ロナルド・
レーガンはレイキャビク市でゴル
バチョフと会見したとき、敵に花
をもたせて【1】、自ら栄誉の戴
冠をふいにしている。フォードの
話はやめておこう【2】。リチャ
ード・ニクソンは（相棒のヘンリ
ー・キッシンジャーとともに）毛
沢東と取引をした。彼が一九七二
年に、あの危険きわまりないA B
M条約【3】に署名したことなど
はいうにもおよばない。アメリカ
大統領が度胸のあるところを見せ
たのは、日本に原爆を落としたの

が最後だった。ちなみに、その度
胸があったのは（やつらに地獄
を見せてやれ」といった）ハリ
ー・トルーマンだ。

【1】一九八六年一〇月の米ソ首脳会談で、ソ
ビエト連邦（当時）のゴルバチョフ書記長が
中距離核弾道ミサイル（INF）、戦略核弾道
ミサイル、宇宙兵器の三分野にわたり大胆な
削減を提案。しかし、レーガン大統領は米國
の戦略防衛構想（SDI）を守るためのこの提
案を拒否、会談は決裂した。

【2】一九七三年一〇月、ニクソン政権の二
期目、アグネー副大統領が脱税や収賄など
の罪に問われ辞任。下院院内総務ジェラル
ド・フォードが後任となる。翌年八月、ウォ
ーターゲート事件によりニクソンが辞任。フ
ォードは大統領に昇格した。事件のスクラン
ダルを拭いきれないフォードは次の大統領選
（一九七六年）でカーター民主党候補に破れ
る。国民の信任をえることは一度もなかった
【3】米ソ間で一九七二年五月に調印した弾
道弾道迎撃ミサイル制限条約のこと。現ブッシ
ュ政権は条約の廃棄を求めていたが、ロシア
は同意せず。二〇〇一年二月、米國は条約
から脱退した。

し かし、オサマ・ビンラディ
ンがタカ力派の願いを聞き入
れて、彼らのためにアメリカ型ナ
シヨナリズムを目覚めさせた。こ
のナシヨナリズムはタカ力派がす
めるプログラムを背景としてい
る。アメリカは何でも思いのま

まにできる。なぜなら、アメリカ
は自由の国、世界でただひとつ本
当に自由な国だから」というプロ
グラムである。そして、どうやら
タカ力派はイチか八チかの賭けにで
たようだ。米國政府は七二年の核
ミサイル条約を破棄した。チェイ
ニー副大統領がはつきり警告して
いるように、政府はイラクとの戦
争を真剣に検討している。イスラ
エル・パレスチナ紛争に関しては、
公平を装うことさえ止めた。世界
のいたるところで、文字どおりだ
れかれの腕をねじあげつづけ、米
國政府の決定に対して、無視でき
ないほどの反対意見がけっして出
てこないよう努めている。

どこの国でどんな勇ましい武力
行使が行なわれても、いまのこ
ろアメリカの世論はたいていのも
のなら支持するだろう。勝てば官
軍である。アフガニスタンの凶悪
なイスラム神学者たちからカラシ
ニコフ銃をとりあげ、凶悪な戦國
武將【4】と思われるような連中
を権力の座にすえた。凶悪だとは
いえ、少なくとも今のところはア

ウェブサイトからコメント(時事評論)を発信しているイマニエル・ウォーラーStein。

9・11後のコメントからは、

アメリカの外交政策や軍事=経済戦略の一連の動きに対する危機感が感じられる。

その中から三篇を厳選して連載していく。

今回は、同氏の元で学んだ山下範久氏による、ウォーラーSteinの「業績・理論」も紹介。



イマニエル・ウォーラーStein
社会学者 一九三〇年生まれ
ニューヨーク州立大学シェンガムトン校付属
フェルナン・ブローデル・センター所長
(写真提供/朝日新聞社)

「近代世界システム」から 9・11を探る

山下範久

ウォーラーSteinは、米國コロンビ
ア大学大学院を修了後すぐに、第二次大
戦後のアフリカ諸國の独立闘争および独
立後の政治過程を専門とする社会学者と
して活躍し始める。その後、彼の名を一
躍、世界的に有名にしたのは、『近代世界
システム』（原著は一九七四年、邦訳は
一九八一年、岩波書店）であった。

同書において彼は、アジア・アフリカ
諸國の政治的な独立にもかかわらず、世
界的な貧富の二極分解の傾向はむしろ強
まっている現実を、五〇〇年におよぶ世
界規模の資本主義の歴史を構造的にモデ
ル化する壮大な理論体系によって明快に
描き出し、冷戦体制のさなかにあって、
東西のイデオロギー対立がむしろ南北問
題を隠蔽する点で共犯関係にあると鋭い
批判を展開した。日本においても、多く
の論者が彼の影響を受け、専門研究の枠
を越えた広い範囲で議論を巻き起こした。
今日、「世界システム」という言葉が、わ
れわれにとって常識的な言葉に含まれて
いるとすれば、それはまさに彼が提起し
た「世界システム」概念の影響力の大き
さを物語るものである。

彼の資本主義批判の特徴は、資本主義
的な利潤の追求が、生産のためにかかる

メリカと手を結んだ武將たちだから。

いいですか諸君、ペンタゴン（米国防総省）に喜んで協力できるかどうか、それだけが問題だ。違つかね。さて、くだんの凶悪な神学者たちは追い出されたように見えるけれど、ほんとうかどうか半年後にまた確かめることとしてよ。

【4】「イスラム神学者」はタリバン、戦闘員將は北朝鮮のこと。

さらにアメリカ世論は政府の一連の政策に疑問を投げかける市民をすべて国賊（あるいはそれに近い何か）として糾弾するだろう【5】。民主党の議員たちは、表向きには対抗勢力だけれども、すっかり縮み上がってしまっただ。軍事計画を熱烈に支持しなければ、自分たちが標的とされるかもしれないからだ。たごえ、その軍事計画が、父親のブッシュはい

うにおよばず、あのニクソンやレーガンでさえ、現職時には触れようともしなかったものであっても、ああ、ジョンソンとマクナマラが政権を取っていたころはまだいい時代だった【6】。いまのタカ派は真剣そのものだ。良心の呵責に苦しむことなく、知性的なためらいもない。もし彼らが、軍事計画をすすめるながら、国内で公民の自由を厳しく制限し、気の毒にも不振にあえいでいる巨大企業群に千数百億ドルもの税金を投げ与えられるなら【7】、まずはぬかりなく、

【1】ブッシュ政権の軍事政策に反対した学生は停学または放校処分、ジャーナリストや大学教授は失職、新聞社は謝罪し、下院議員は脅迫された。一般人にもそうした影響が出ている。（マシュー・ロスチャイルド「米」プロダクション」誌編集長の「新マッカーシズム」： <http://globalresearch.ca/articles/ROT201A.html>）

【2】ロンドン・ジョンソンはケネディ政権の副大統領。一九六三年、ケネディ暗殺により大統領に昇格。ロバート・マクナマラ国防長官とともにベトナム戦争の深刻化を招いた。

【3】九一一事件以降、大企業は減税や過去五年間の税金の払い戻しなどの優遇を求めてロビー活動を始めた。おもな企業と総額は、IBM社一四億ドル、フォード社一〇億ドル、GM社八億三〇〇万ドル、GE社六億七〇〇万ドル、金融業界は計二〇億ドル、航空業界は一五〇億ドル。



イラストレーション / 吉間ユカリ

イマニエル・ウォーラーズテインが語る

第1回

コストの多くを不断に「外部化」することでなりたっている点を強調するところにある。すなわち、生産の過程で生じる廃棄物は「外部」の環境に垂れ流し、生産に必要な労働力の管理は「外部」にある個々の労働者の家庭の負担となり、賃金水準の上昇や環境基準の厳格化によって自国で採算が合わなくなった産業は「発展途上国」に「配置転換」し、そのような「外部化」に素直に応じない人びとを「自由の敵」と非難する。資本主義の活力が生み出しているかにみえる莫大な利潤は、実は、文句を言うことができないう立場に置かれた人びとや国々そして自然環境にコストを押しつけることで、暴力的に確保されているにすぎないものだということである。

しかし、この世界システムに本当の意味での「外部」など存在するのだろうか。「外部」に押しつけたはずのコストは、まわりまわって、いずれシステムそのものを限界に追いやることになる。そのとき「自由の敵」とは、いったい誰のことなのだろうか。

彼のこの議論は、近年さらに切迫したものとなった。世界の人々の多くが、この限界に気づき始めたからである。彼は冷戦の終結直後から、共産主義の崩壊は、決して「自由世界」の勝利ではなく、むしろ資本主義世界システムがもたらす進歩に対する信頼を根本的なところで掘り崩してしまっているものである」という主張を強力にするようになった。その主張は、一つの文明としての近代世界システム、いいかえれば歴史的单位として存在する資本主義のシステムの物理的な限界を見据えた彼の長年にわたる分析の努力とあいまって、長期的な歴史的展望をもって、この資本主義のシステムに代えるべき、より民主的で、より持続可能なシステムの構想に知を集める必要がある」とい

ま だ少しは冷静な人たちが残

っているから、これから実際に何が起るか、ここでその人たちのために予想してみよう。アメリカは「イラク攻撃」をやるつもりだろうか。その可能性は高いなげか。度を越えた攻撃性は強さではなく、弱さの証であることが多いからだ。もし、アメリカ政府がすべて思いのままになると感じたら、バグダッドを爆撃する必要などないだろう。マキアヴェリヤグラムシ【8】を読むまでもなく、世界を支配する最上の方法が武力でないことは分かっている。武力は二番目が三番目だ。

ここで時事評論第七六「スーパーパワー？」の議論を繰り返したくないが、もう一度簡単に述べよう【9】。アメリカ合衆国は今、世界の覇権国として衰退期にある。覇権を失いつつあるとき、覇権国には選択肢が二つしか残されていない。過去に蓄えた財産から恩寵を受けながら、現実にかしくく対応してゆくか。それとも、滅亡するか。わがタ力派は滅亡を選択した。彼らの中には、友だちと一緒にアルマゲドンを生き延び、このまま権力の中枢に留まることができると信じて疑わない者もいるだろう。もちろん戦争にもなう（副次的な損害）は最小限におさえた上での話だ。ものごとがもつとよく見えてくる者は（「Après moi, le déluge」我が後には洪水よ来たらば来たれ）破れかぶれ、どう

なってもいいと思っているのかも
しれない。あと残るのは、ストレンジラブ博士【10】になつてしまつた者たち……狂っている！

【8】「自分の同朋である市民を殺害し、友人を裏切り、信義を欠き、慈悲心を欠き、宗教心を欠いた行動を、力量と呼ぶわけにはいかない。そのような方法によって権力を獲得することはできても、栄光は獲得できない」マキアヴェリヤ・君主論 岩波文庫、67ページ、アントニオ・グラムシ（一八九一—一九三七年）はマキアヴェリヤと同じくイタリアを代表する思想家。武力によって権力を獲得し、権力によって社会主義を実現できるという考えは誤りだ、と主張した。

【9】時事評論第七六は山下範久により翻訳・発表（藤原書店「環」第八号）されている。
【10】映画「博士の異常な愛情」（一九六四年、スタンリー・キューブリック監督）の登場人物、核爆弾を愛し、最終核兵器が爆発した後の地球環境と人類の姿を微笑みながら予測する。

いま私たちは危険なときに生きています。タ力派でありつづけるのは並大抵のことではないから、好機はなかなか回ってこない。タ力派にとって今こそ稀有の好機だ。この機をとらえなければ、逃してしまえば、次のチャンスまで承らなくてはならないだろう。ということはずまり、

今、彼らを止められるなら、最悪の事態は回避できるということである。では、そうするための条件は何か。それは危機感をどれほど抱いているか、その度合いにかかっている。現在アメリカの攻撃対象となっている国々が抱く危機感だけをいうのではない。合衆国とその傘下にある国々の人ひとすべて

アメリカの政治中枢にいる人びと、NATOに加盟する各国政府の人びと、各国軍の指導的立場にいて、「アメリカのさらなる軍事行動」がどのような結果をもたらすかを理解している人びと が抱く危機感もまた問われている。そして、フランクリン・ルーズベルトが（中道左派）と呼んだ人びとが、どれだけ知性を持っているか、どれだけすばやく立ち上げられるかにかかっている。

中道左派は過去三カ月のあいだ何も発言していないに等しい。いくつかの理由がこれには考えられる。まず、九月一日の事件に対する感情的反応がある。オサマ・ビンラディンの手法や目的に世界世論が共感を示さないことや、つい最近では、タリバンが急速に敗退してゆく様子であることも、彼らが沈黙する理由だろう。こうした理由はそのまま、タ力派が頼みの綱としてきたところだ。今、タ力派が時を得ているならば、今こそ不退换の行動を起こし、彼らに對抗すべき時である。
（時事評論 第七九回二〇一一年一月一五日）

翻訳・訳注／安瀧一樹・別処珠樹
監修／山下範久
Immanuel Wallerstein, Commentary No. 79 (Dec. 15, 2001), "The Swooping of the Hawks?", Fernand Braudel Center, Binghamton University. <http://focbinghamton.edu/commentary.htm>
原文の著作権はイブリン・ヘル・ウォーラス・ティン・ロビンソン。

う切迫した呼びかけを導いている。
昨年九月一日のテロ事件に対しても、彼は独自の立場から、事態の本質に迫る冷静な視角を提示している（テロ直後に出された時事評論は、私の個人ウェブサイトに上に邦訳を掲載）。重要なことは、われわれの生きている現在の世界システムが、このテロによって一変したというのではなく、むしろ近代世界システムの構造的な限界がこのテロの条件となっているという点である。かくて、テロに直面して、あるいはもっと広い意味での安全保障の破綻や「安心」の喪失に直面して、短期的で即効的な解決を求め、いたすらに性急で強硬な「改革」を、展望もなくひたすら積み上げていくような、いわば「改革中毒」におかされた知の姿勢は、ウォーラー・ステインのもっとも厳しく批判するところである。

必要なのは、数百年単位でこの世界をかたちづつてきた資本主義のシステムが、別の原理に基づくシステムへと脱皮できるかどうかの歴史的な転換点に、現在のわれわれが立っているという認識であり、その認識のもとに、現に社会や経済のウォラントリー（自発的）な領域に現れつつある新しいシステムの可能性を、はらんだ実践をいかに結びつけていくかという問題意識が、ウォーラー・ステインの呼びかけに応じる鍵にほかならない。
今号から紹介される三つの時事評論はこのような長期的な視野のなかで、事態の本質を見ぬく冷静な分析とそこから要請される切迫した問題意識とが簡潔かつ力強く論じられた最近でも出色の文章である。かならずや読者諸氏に訴えかけるところがあると信じてやまない。

……
やましたのりひら、北海道大学大学院文学研究科助教授。専門は世界システム論・歴史社会学。
http://www.ne.jp/asahi/norihisa.yamashita/